龍谷大学アジア仏教文化研究センター　ワーキングペーパー
No.16-04（2017 年 3 月 31 日）
研究論文

大谷光瑞師の思想と事業
～その歴史的意義の再検証に向けて～

三谷真澄
（龍谷大学国際学部教授）

目次

１．はじめに
２．大谷光瑞師の農業観
３．光瑞師の農業実践
４．仏教者：大谷光瑞師と農業

【キーワード】
大谷光瑞　農業　トルコ　台湾　二楽荘

2015 年度、装いもあらたに第二期「アジア仏教文化研究センター（以下 BARC）」がスタートした。研究課題は「日本仏教の通時的共時的研究―多文化共生社会における課題と展望―」となり、筆者の属しているのは、グループ 1 「通時的研究班」ユニット B 「近代日本仏教と国際社会」であり、その中のサブユニット 3 では、大谷光瑞師の思想と事業の再検証をテーマとしている。

大谷光瑞師（1876-1948）は、大正から昭和の激動の時代、特に戦中戦後を経験した貴重な歴史的証人である。彼は、浄土真宗本願寺派の第 22 世宗主をつとめた仏教者・念仏者であるとともに、日本史上唯一の組織的な中央アジア探検として知られる大谷探検隊を派遣した探検家でもあった。

しかし、彼の多面性はそれだけにとどまらない。光瑞師は、収集資料の研究調査を行う光寿会を主宰し、自らも研究論文を執筆したという点では研究者であり、武庫仏教中学の創設や大谷学生の選抜という点では教育者であり、さらには、ジャワ、トルコ等での産業開発という点では実業家でもあった。また、植物や農業関連の豊富な知識に見えるように農学者であり、多くの著述を世に問うた著述家としての側面も併せ持っていた。

本サブユニットでは、彼のそうした様々な側面を再検証しつつ、特にこれまで比較的なされてこなかった光瑞師自身の思想との関連で、国際的規模で遂行された彼の事業活動の歴史的背景や意義を再考する。それによって、光瑞師が開拓した独自的な国際交流活動の特徴を明らかにしようと企図している。宗教者（仏教者・念仏者）でありつつ、探検、研究、教育、実業、農業、著述といった様々な活動をおこなった原動力を探りたい。

以下、2014 年度より 2015 年度まで、光瑞師のトルコでの「事業」をテーマとした龍谷大学国際社会文化研究所による共同研究プロジェクトの研究成果報告書『大谷光瑞のトルコでの動向-「仏教」と「農業」のあいだ』（三谷真澄・ヤマンラール水野美奈子編、2016 年 3 月、国際社会文化研究所）より、関係部分を抜粋して掲載する。

仏教者・大谷光瑞師と農業

はじめに

大谷光瑞師は、実に多彩な人物であった。浄土真宗の開祖親鸞の流れを汲む家系に生まれ、浄土真宗本願寺派の第 22 世宗主でもあった点では、仏教者・宗教者であり、日本唯一の組織的な中央アジア探検として知られる大谷探検隊を組織し、自ら参加したという意味では、探検家でもあった。また、インド、中央アジアをはじめアジア各地で収集した資料の研究調査を行う光寿会を主宰したという点では研究者としての側面をもっていた。また、武庫仏教中学の創設や大谷学生の選抜育成という点では教育者としての側面を、さらには、ジャワ、トルコ、台湾等での産業開発

という点では、実業家としての側面をも併せ持っていたと言えるであろう。

この中で、トルコとの関係では、大谷学生・後藤智のガラタ・サライ派遣とアンカラでのバラ園と香水工場､ブルサでの日土織物会社の経営が主要なものであろう。

一方、大谷探検隊が収集した資料の中には、多種の言語・文字で記された仏典写本が多数含まれているが、トルコ・イスタンブル大学図書館には、同時期に同地域を探検したドイツトルファン隊収集の当該資料の一部が所蔵されている。すでに紹介したように、両探検隊収集資料が接合する例も発見されている[1]。

125 年前の 1890 年、トルコ軍艦エルトゥールル号が和歌山串本沖で遭難し、見ず知らずの生存者を名もなき市井の人々が助けるという、日本とトルコの歴史的交流があった。串本の現場付近にはトルコ記念館や記念碑があり、その中に光瑞師の揮毫を含む石碑が建てられている[2]。このことは、光瑞師の人間的交流の深さと日本とトルコとの不思議な関係を示している。

大谷光瑞師の農業観

光瑞師は、生涯を通じて農業を重視し、1940（昭和 15）年 6 月 24 日、「蘭領東印度」すなわちインドネシアに渡航する際のパスポート（仁本正恵氏旧蔵）の職業欄にも、「農業（英語欄　Agriculture）」と自署されている程である[3]。

以下、光瑞師の著作の中から、農業にかかわる言説を列挙したい。

○「農は國の本なり。農興らずば人存し難し。[4]」

○「農産は國の本なり。（中略）政府は常に農の國本なるを忘れず、国家の権力を行使し、農産を豊饒ならしめ・・・[5]」

---

[1] 旅順博物館・龍谷大学共編『中央アジア出土の仏教写本』（龍谷大学西域文化研究会、2012 年）の巻頭口絵、および荻原裕敏「多様な中央アジア仏教におけるトカラ仏教の位置づけ～旅順博物館所蔵資料を中心として～」（pp.97-120）参照。

[2] この記念碑には、「昭和四年四月五日　篆額　大谷光瑞書　正六位勲三等　稲畑勝太郎撰」と刻されている。光瑞師の篆額部分は「弔魂碑　光瑞書」とある。

[3] このパスポートは、2007年7月14日、筆者が青森市内の浄土真宗本願寺派寺院・光行寺を訪問し、光瑞師の側近であった仁本正恵（熙）氏の遺品中から発見したものである。2010年「トルコにおける日本年」にあたり、ブルサ市内で「ブルサにおける最初のトルコ・日本産業提携：ギョクチェン家と大谷光瑞」展（2010.9.16-12.29）が開催され、光行寺様のご好意により実物が展示された。また、同年イスタンブル市内で「新月と日の丸：山田寅次郎・伊藤忠太・大谷光瑞イスタンブールにいた三人の日本人」展でも複製が展示され、Esenbel,Selcuk & Kucukyalcin, Erdal & Miyuki Girardelli “Hilal ve Güneş: İstanbul’da Üç Japon- Yamada Torajirō, Itō Chūta, Ōtani Kōzui”、Istanbul Research Institute、2010に掲載された。

[4] 『大谷光瑞興亜計畫』第六巻「熱帯農業」【一】第一章　総論　一、農は国の本なり　農業の目的 p.1「昭和十五年三月十三日上海ニ於テ」の自序あり（初出:『大乗』XIX-8、1940 年）。

[5] 『大谷光瑞全集』第七巻「處世篇」[無題録四五二]p.452（初出:『大乗』1930 年）。

○「夫れ農は國の基なり。[6]」
○「人食なくば死す。人なくば國存せず。國の本たるや工に非ずして農に在るは疑を容れず。[7]」
○「香料製造は私の職業で御座いますので、種々の植物を栽培して居ります[8]」
○「不肖は、自ら職業を農業に撰び、其の身分を登記するや、常に農と記し、自ら誇りとなせり。世職業多しと雖も、農業より貴きはなし。農を首めとし、工商之に次ぐ。其の他政治、教育、宗教を職となせる輩は、皆其の下位にあり。蓋し彼等は農工商の恩澤により、生息せるものにして、農工商なくば、一日も其の生命を持続する能はざるなり。

元来職業に高下なしと雖も、假りに貴賤の別を分たば、農、工、商、貴にして、政治、教育、宗教等の寄食者は賤たるを免れざるなり。[9]」
○「殊に私の職業は農業でございますから−（中略）農業者が、農業に不適当な所へ行って農業をやらねばならん。これ位世の中に皮肉なことはありません。私は今まで嫌だから逃げて居つたのです。満洲へ行って農業することは見込がありませんから、それで逃げを張って逃げ終せて居ったのです。それで一遍も満洲で私農業をやつたことはございません。どこで大谷やつて居つたか？ジャバでやって居る。世界中一番よいから。・・・・有難いことに世界中歩いて知って居ります。一番よい所を知つて居ります。[10]」

光瑞師の農業実践

光瑞師は、1914 年 5 月の宗主辞任後、シンガポール、ジャワ、トルコ及び台湾で農業を主体とした「起業」を行っている。

1916 年、シンガポールのゴム園に始まり、セレベス島のコーヒー園、ジャワ島のシトロネラ園、トルコ・ブルサでの養蚕・絹織物・染織、アンカラでのバラ園・香水製造を試みている。一方、二楽荘や台湾・逍遥園でも果樹を栽培していたことはよく知られている。

宗教者（仏教者）である光瑞師が、自己の職業として「農業」を重視した意義は

---

6 同[国民之自覚] p.520（初出：『大乗』IX-2~4, 1930 年 2 月）。

7 『大谷光瑞興亜計畫』第六巻「熱帯農業」「工業立國を駁す」p.5（初出:『大乗』XIX-8、1940 年）。

8 『大谷光瑞全集』第六巻「教義編」p.524（大正十四年三月六日上海日本人倶楽部での講演にて）、1935 年刊、1925 年。

9 『大谷光瑞全集』第七巻「處世編」[国民之自覚]pp.533-534（初出：『大乗』IX-2-4、1930 年）。

10 『大谷光瑞全集』第十二巻「随筆編」pp.497-498 京都時事所感（昭和八年四月五日午前十時—十二時　京都女子専門學校に於ける京都光瑞會講演（初出：『大乗』XII-10、1933 年）。

どこにあるのであろうか。以下、光瑞師のおこなった農業に関する事業を列挙し、トルコの事業の位置づけや他地域での事業との相違を確認したい。

二楽荘と農業

1908（明治 41）-1914（大正 3）年（1932 焼失）　34 歳～39 歳

「二楽荘園芸部」・・・マスクメロンや葡萄の温室栽培、林檎・梨・洋李・スイカなどの栽培、米の生産、牛乳、乳酸も販売[芦屋市立美術博物館 1999、2003]

シンガポールと農業（1916-1917）

1916（大正 5）年　41 歳

この頃シンガポールに農園(旭日護謨園)を経営し、ゴム栽培（1917（大正 6）年まで継続）[加藤 2000:249-250]

インドネシアと農業（1917-1937、**メナドコーヒー園**：1918-1920）

1917（大正 6）年 2 月中旬以後　42 歳

「蘭領印度農林工業会社」をジャワ島スラバヤ市に設立。最初セレベス島メナドで大森林の開拓に着手、その後中止。主力をジャワに移して農園経営。

1918（大正 7）年 4 月　43 歳

セレベス島メナド附近にて英人より伽琲（コーヒー）園（耕雲山荘）を購入し経営（1920（大正 9）年まで）

1920（大正 9）年　45 歳

5 月 11 日　上海出航蘭領セレベスへ

7 月　ジャワ島ソラバイヤ附近にてシトロネラ園を購入（ジュランゼロ農園）、ジャワ西部にスカハジ農園（シトロネラ栽培）（環翠山荘）、パノマラ農園（養蚕）（大観荘）を経営（日華事変前まで継続）

1928（昭和 3）年　53 歳

6 月 24 日（7 月 8 日まで）バンドン市でオランダ政府の要請により農園の蚕糸等を陳列

今年の農園の成績は、環翠・大観両荘は昨年と大差なく、若干進歩あり、環翠荘のバラは発育不良菊も不良、大観荘は良好、ポコステンモンパチユリは極めて良好、大観荘の桑苗は優良、園蔬は両園とも佳、爪哇における農園経営も十余年の歳月を重ね、地積一千ヘクタール、従業員三十名を数ふ、環翠、大観両荘は彼等に任せ、更に市外に悠然荘を新築す。(『鏡如上人年譜』p.98)

1940（昭和 15）年　65 歳

7 月～8 月末　神戸発ジャワに赴く（スラバヤ、バンドン、ガルー近郊チヌルパン農場、バタビヤ等へ)

9 月『熱帯農業』（『大谷光瑞興亜計画』第六・七・八・九巻合本）刊行

トルコと農業（1927-1933）

ブルサでの絹織物と染織

1928 年「不肖の蚕業投資は大規模に、トルコ共和国の領土に於て明年度より実行に着手せんとす。地中海岸は世界第一の蚕業適当の地なり。広大なる美田は開て海岸に列なれり。殆んど何等の危険だもなく起業をなし得べし。到底ジャバ蚕業の如き未試験の比にあらざるなり」（『大谷光瑞全集』第 9 巻「鵬遊記」p.396）

アンゴラ（アンカラ）でのバラを栽培と香水製造[11]

「薔薇は美なりと雖も、未だ牡丹の濃艶に及ばず。その清香に至ては、菊蓮を圧し、花中第一の称あり。就中ロザセンチフオリア、ロザダマスセナの如きは、有名なる香水を生ず。甲は多く、仏国カンヌの付近グラスに於て栽培し、乙はバツカン山の付近に栽培せり」『大谷光瑞全集』第 8 巻「（六）花」（大正四年七月二十三日　普陀山に於て）p.172

1928 年「トルコの香料工場は明年度より香料抽出をなさんとす。故に盡くベンヂン法による事に決し、その機械をミツセル氏に依頼せり。同氏はトルコの薔薇は優良なりと云へり。」第五信（十月七日　ロザンに於て）『大谷光瑞全集』第 9 巻「鵬遊記」pp.406-407

この二つの事業については、ヤマンラール水野美奈子氏の論攷において詳細に触れられているので、詳細はそちらに譲る。いずれにしても、ブルサの事業が「日土織物会社」（外務省外交史料レファレンスコードB09041433200）、「日土合弁絹織物会社」（同B09041411500）として、アンカラの事業が「薬品香料化学産業株式会社」（同B09041286500）として、現地で会社を設立し、正式に契約を結んだ上で、事業を展開したことが知られる。

台湾と農業（1935-）

1935（昭和 10）年　60 歳

---

[11] 参考として、エルダル・キュチュッキュヤルチュン氏の分析を以下に掲げる。
「一九二七年三月二十八日に在トルコ日本大使から外務省宛に送られた報告書」
大統領ケマルパシャと大谷光瑞氏の間に大統領のアンカラの近くにある「アヒマスッド農園」で共同経営する契約が交わされた。
1.この契約が一九二七年（昭和二年）二月二十二日にアンカラにて調印された。
2.契約書に大統領、大谷光瑞そしてトルコのイッシ銀行のそれぞれの代理人がサインをした。
3.農園事業の資本の五万一〇〇〇リラを大統領ケマルパシャ、そして五万リラを大谷光瑞氏が払うことになった。
4.大谷光瑞氏は三月十七日に二万五〇〇〇リラをイッシ銀行に振込み、残額を四月中に上海から送金する。
5.この事業が雇う人の内八人は日本人で残りはトルコ人になる。
エルダル・カ・ヤルチュン「大谷光瑞とトルコ–建国の父ケマルパシャのパートナーとしての大谷光瑞」『大谷光瑞とアジア―知られざるアジア主義者の軌跡』(柴田幹夫編)、勉誠出版、2010、pp.291-292 参照。

2 月 21 日　台北発、南部方面及び東海岸全島の視察へ（これより先、産業視察のため渡台、爾来台北市各方面を視察）

同年 3 月 2 日に、板橋無線電信局及び植物園を視察、7 日には中央研究所農業部、台北帝大農学部等に赴く。

1940（昭和 15）年　65 歳

11 月 1 日（3 日まで）高雄の新邸逍遥園開園式を挙行

逍遥園は高雄に新築した邸宅で、附属園は一万坪に余り、ゴム・コーヒ・マンゴー・アボカド・サボジラ・バナゝ・荔枝、柑橘等の試験栽培を今春来開始しつゝあった。（『鏡如上人年譜』p.122）

「大谷農園」

大谷光瑞師は「「熱帯農業」に関心を示し、「茶園」「果実園」「缶詰工場」「蔬菜園」などを自ら経営した。とくにバナナは、長崎に送り、そこから上海に輸出するように光瑞自ら手はずを整えた。」

茶の栽培：台湾の山地開発

果樹園：レモン、バナナ、パイナップル→缶詰工場

蔬菜：満州方面に輸出

バナナ：台湾産物中第一、15 万トン生産、80％輸出[柴田 2014:129-130]

遷化直前

1948（昭和 23）年　73 歳

夏頃　香川県よりオリーブの苗を取寄せ、国東半島に移植す（『鏡如上人年譜』p.129）

仏教者：大谷光瑞師と農業

光瑞師は、パスポートの職業欄にも「農業」と記載するほど、農業を重視していたことは明らかであるが、その思想的な背景を直接示す言説は少ない。

「今阿含経により是れを記さば、上古の世に天人の地上に降れるあり。遊戯歌舞して日の尽るを知らず。遂に空腹を感じ艸実を採り是れを食ふ。而して楽しみに飽き遊びに倦み上天に帰らんと欲するも肥躯復前日の軽舞に適せず。況や騰空風を御すをや。此時悔も及ばず。遂に地居し依前艸実を食とせり。後子孫漸く繁く艸実増々乏し。遂にこの艸実を栽培しその食用に充つ。而して猾智と遊惰の徒は自から栽る所なく人の栽ゆる物を欺き之を奪ふ。為に紛争絶ゆるの期なし。

而してその住民の一部はこの煩を厭ひ遠く山林に隠れ他方に去りその大半は紛争を止めんが為相諮り最も聡明多智の人を選びて裁判の任に当らしめ以て盗奪の行ひを禁ず。是れを名けて田主と号す（田主の梵名はKsatreya）と云ふ。[12]」

[12] 『大谷光瑞興亜計画』熱帯農業【一】pp.1-5 総論、農は国の本なり、農業の目的

という記述が見られ、阿含経典によって農業との関係を示している。しかし、この根拠となっている仏典名や引用箇所は未だ同定されていない。

一方、大谷光瑞猊下記念会編『大谷光瑞師の生涯』には、「彼が一貫したる七十三年間の生涯は、これを要約すれば、二個の目的を果たさんが為に捧げ尽くしたと云ふ可きである。

第一の目的は、世界宗教中の最も広大無辺にして、深奥妙理ある仏教を振興し、之を以て精神的に東亜民族の興隆を促すことである。第二は東亜の凡有る資源を開拓し、東亜民族の生活を向上せしめ、東亜をして自給自足、現在の植民地的状態を一掃し、以って東亜の隆昌をはかることである。（中略）彼は如上の目的を果たす為に二個の武器を有した。其の一は講演である、其の二は著作である。[13]」

と分析されている。ここには、農業という言葉こそ使用されていないが、仏教と農業の関係が示唆されている。「世のなか安穏なれ　仏法ひろまれ[14]」の具体的展開として、実生活、中でも食生活の基盤となる農業の充実促進によって自給自足的生活を維持することの重要性を意識していたのではあるまいか。精神的基盤としての仏教と実生活の基盤として農業を中心とした生活を果たすことが、光瑞師の見据えた現在と未来の姿であったのではあるまいか。

参考文献

芦屋市立美術博物館編『モダニズム再考―二楽荘と大谷探検隊』芦屋市立美術博物館、1999「園芸部の活動」pp.118-122
芦屋市立美術博物館編『モダニズム再考―二楽荘と大谷探検隊Ⅱ』芦屋市立美術博物館、2003「二楽荘内の事業―園芸―」pp.78-91
エルダル・カ・ヤルチュン「大谷光瑞とトルコ–建国の父ケマルパシャのパートナーとしての大谷光瑞」『大谷光瑞とアジア―知られざるアジア主義者の軌跡』（柴田幹夫編）、勉誠出版、2010、pp.270-314
大谷光瑞「熱帯農業」『大乗』IV-11･12、V-1･2（1925-1926）
大谷光瑞『花』大乗社、1931
大谷光瑞『大谷光瑞全集』（全 13 巻）大乗社、1934-1935（特に第 8、9 巻）
大谷光瑞『大谷光瑞興亜計畫』（全 10 巻）大乗社、1939-1940（「熱帯農業」第 6～9 巻）
大谷光瑞『熱帯農業』大乗社、1942（上記第 6～9 巻の合冊本）
大谷光瑞・薄井恭一『食 食文化シリーズ』春秋社、1983
大谷光瑞猊下記念会編『大谷光瑞師の生涯』（伝記叢書 149）、大空社、1994
岡西為人『大谷光瑞師著作総覧』瑞門会、三五書院、1964
片山章雄編『予會々英國倫敦に在り　本願寺留学生・欧亜往還西本願寺留学生・大谷探検隊の 100 年』大谷記念館、2004
加藤斗規「大谷光瑞と南洋」『大谷光瑞とアジア―知られざるアジア主義者の軌跡』（柴田幹夫編）、勉誠出版、2010、pp.248-269

[13] 大谷光瑞猊下記念会編『大谷光瑞師の生涯』（伝記叢書 149）、大空社、1994「第十一章　大谷光瑞の二大目的」pp.102-103

[14] 『親鸞聖人御消息』第 25 通（『浄土真宗聖典註釈版(第 2 版)』p. 784）の中にある言葉であり、「世のなか安穏なれ」は、親鸞聖人 750 回大遠忌法要のスローガンでもあった。

鏡如上人七回忌法要事務所編輯『鏡如上人年譜』鏡如上人回忌法要事務所、1954
柴田幹夫編『大谷光瑞の研究―アジア広域における諸活動』勉誠出版、2010
柴田幹夫『大谷光瑞の研究―アジア広域における諸活動』勉誠出版、2014
白須淨眞『大谷探検隊とその時代』（museo12）、勉誠出版、2002
白須淨眞『大谷光瑞と国際政治社会 チベット・探検隊・辛亥革命』勉誠出版、2011
白須淨眞『大谷探検隊研究の新たな地平 アジア広域調査活動と外務省外交記録』勉誠出版、2012
瑞門会『大谷光瑞上人生誕百年記念文集』瑞門会、1978
大乗社『大乗』1922-1943（22 巻 12 号、通巻 264 巻で終巻）
仁本正恵『本願寺の明星―大谷光瑞上人の生涯』神戸別院慶讃法要事務所、1973
廣瀬覺『大谷光瑞と現代日本』文芸社、2001
龍谷大学東洋史研究室編『東洋史苑・大谷光瑞 50 回忌記念号』（50／51 合併号）、1998
ヤマンラール水野美奈子「トルコのギョクチェン家所蔵の七宝花瓶に関して」『国際社会文化研究所紀要』第 15 号, 龍谷大学国際社会文化研究所、2013, pp.165-171
ヤマンラール水野美奈子・長場紘・村松伸・パオロジラルデッリ・ジラルデッリ青木美由紀・永田雄三・佐野東生・嵩満也・三谷真澄・鈴木董「世界の中の日本・日本の中の世界（2007-2009 年）－イスタンブル旧総領事館と日本の文明開化思潮」『国際社会文化研究所紀要』16 号、龍谷大学国際社会文化研究所、pp.9-59、2014（三谷真澄「西域文書が結ぶ日本とトルコ」（35-45 頁）執筆）
Esenbel,Selcuk & Kucukyalcin, Erdal & Miyuki Girardelli “Hilal ve Güneş: İstanbul’da Üç Japon- Yamada Torajirō, Itō Chūta, Ōtani Kōzui”「新月と日の丸：山田寅次郎・伊藤忠太・大谷光瑞イスタンブールにいた三人の日本人」展観図録、Istanbul Research Institute、2010
Haz. Demirağ :The Turkish Japanese Factory - Türk Japon Fabrikası,Bursa'ya Dokunan Tarih "1928" History Woven in Bursa, Papyrus Sahaf, Istanbul, Turkey,2015

	A	B	C	D	E	F
1	著者	タイトル	掲載	出版年	出版社	備考
2	大谷光瑞	無量園草木記	『大乗』 I -01	1922	大乗社	『大乗』 I -1～12, II -2～6,8～11, III -1,2,4,5,8～12, IV -1～10に連載
3	大谷光瑞	無量園草木記	『大乗』 I -02	1922	大乗社	
4	大谷光瑞	無量園草木記	『大乗』 I -03	1922	大乗社	
5	大谷光瑞	無量園草木記	『大乗』 I -04	1922	大乗社	
6	大谷光瑞	無量園草木記	『大乗』 I -05	1922	大乗社	
7	大谷光瑞	無量園草木記	『大乗』 I -06	1922	大乗社	
8	大谷光瑞	無量園草木記	『大乗』 I -07	1922	大乗社	
9	大谷光瑞	無量園草木記	『大乗』 I -08	1922	大乗社	
10	大谷光瑞	無量園草木記	『大乗』 I -09	1922	大乗社	
11	大谷光瑞	無量園草木記	『大乗』 I -10	1922	大乗社	
12	大谷光瑞	無量園草木記	『大乗』 I -11	1922	大乗社	
13	大谷光瑞	無量園草木記	『大乗』 I -12	1922	大乗社	
14	大谷光瑞	無量園草木記	『大乗』 II -02	1923	大乗社	
15	大谷光瑞	無量園草木記	『大乗』 II -03	1923	大乗社	
16	大谷光瑞	無量園草木記	『大乗』 II -04	1923	大乗社	
17	大谷光瑞	無量園草木記	『大乗』 II -05	1923	大乗社	
18	大谷光瑞	無量園草木記	『大乗』 II -06	1923	大乗社	
19	大谷光瑞	無量園草木記	『大乗』 II -08	1923	大乗社	
20	大谷光瑞	無量園草木記	『大乗』 II -09	1923	大乗社	
21	大谷光瑞	無量園草木記	『大乗』 II -10	1923	大乗社	
22	大谷光瑞	ジャバ島に於ける香料植物の研究	『大乗』 II -11	1923	大乗社	
23	大谷光瑞	無量園草木記	『大乗』 II -11	1923	大乗社	
24	大谷光瑞	無量園草木記	『大乗』 III -01	1924	大乗社	
25	大谷光瑞	無量園草木記	『大乗』 III -02	1924	大乗社	
26	大谷光瑞	無量園草木記	『大乗』 III -04	1924	大乗社	
27	大谷光瑞	無量園草木記	『大乗』 III -05	1924	大乗社	
28	大谷光瑞	無量園草木記	『大乗』 III -08	1924	大乗社	
29	大谷光瑞	無量園草木記	『大乗』 III -09	1924	大乗社	
30	大谷光瑞	無量園草木記	『大乗』 III -10	1924	大乗社	
31	大谷光瑞	無量園草木記	『大乗』 III -11	1924	大乗社	
32	大谷光瑞	無量園草木記	『大乗』 III -12	1924	大乗社	
33	大谷光瑞	無量園草木記	『大乗』 IV -01	1925	大乗社	
34	大谷光瑞	無量園草木記	『大乗』 IV -02	1925	大乗社	
35	大谷光瑞	無量園草木記	『大乗』 IV -03	1925	大乗社	
36	大谷光瑞	無量園草木記	『大乗』 IV -04	1925	大乗社	
37	大谷光瑞	無量園草木記	『大乗』 IV -05	1925	大乗社	
38	大谷光瑞	無量園草木記	『大乗』 IV -06	1925	大乗社	
39	大谷光瑞	無量園草木記	『大乗』 IV -07	1925	大乗社	
40	大谷光瑞	無量園草木記	『大乗』 IV -08	1925	大乗社	
41	大谷光瑞	無量園草木記	『大乗』 IV -09	1925	大乗社	
42	大谷光瑞	無量園草木記	『大乗』 IV -10	1925	大乗社	
43	大谷光瑞	熱帯農業	『大乗』 IV -11	1925	大乗社	1940年の興亜計画の一部とは別
44	大谷光瑞	熱帯農業	『大乗』 IV -12	1925	大乗社	
45	大谷光瑞	熱帯農業	『大乗』 V -01	1926	大乗社	1940年の興亜計画の一部とは別
46	大谷光瑞	熱帯農業	『大乗』 V -02	1926	大乗社	1940年の興亜計画の一部とは別

	A	B	C	D	E	F
47	大谷光瑞	重ねて熱帯農業を論ず	『大乗』Ⅵ-06	1927	大乗社	
48	大谷光瑞	重ねて熱帯農業を論ず	『大乗』Ⅵ-07	1927	大乗社	
49	大谷光瑞	食	『大乗』Ⅹ-01	1931	大乗社	
50	大谷光瑞	食	『大乗』Ⅹ-02	1931	大乗社	
51	大谷光瑞	食	『大乗』Ⅹ-03	1931	大乗社	
52	大谷光瑞	食	『大乗』Ⅹ-04	1931	大乗社	
53	大谷光瑞	花	『大乗』Ⅹ-07	1931	大乗社	『大乗』Ⅹ-7～11,Ⅺ-1,2,5～11に連載
54	大谷光瑞	花	『大乗』Ⅹ-08	1931	大乗社	
55	大谷光瑞	花	『大乗』Ⅹ-09	1931	大乗社	
56	大谷光瑞	花	『大乗』Ⅹ-10	1931	大乗社	
57	大谷光瑞	花	『大乗』Ⅹ-11	1931	大乗社	
58	大谷光瑞	花	『大乗』Ⅺ-01	1931	大乗社	
59	大谷光瑞	花	『大乗』Ⅺ-03	1931	大乗社	
60	大谷光瑞	花	『大乗』Ⅺ-05	1931	大乗社	
61	大谷光瑞	花	『大乗』Ⅺ-06	1931	大乗社	
62	大谷光瑞	花	『大乗』Ⅺ-07	1931	大乗社	
63	大谷光瑞	花	『大乗』Ⅺ-08	1931	大乗社	
64	大谷光瑞	花	『大乗』Ⅺ-09	1931	大乗社	
65	大谷光瑞	花	『大乗』Ⅺ-10	1931	大乗社	
66	大谷光瑞	花	『大乗』Ⅺ-11	1931	大乗社	
67	大谷光瑞	台湾島の現在	『大乗』ⅩⅣ-05	1935	大乗社	『大乗』ⅩⅣ-6～12,ⅩⅤ-1～12,ⅩⅥ-1,2に連載
68	大谷光瑞	台湾島の現在	『大乗』ⅩⅣ-06	1935	大乗社	
69	大谷光瑞	台湾島の現在	『大乗』ⅩⅣ-07	1935	大乗社	
70	大谷光瑞	台湾島の現在	『大乗』ⅩⅣ-08	1935	大乗社	
71	大谷光瑞	台湾島の現在	『大乗』ⅩⅣ-09	1935	大乗社	
72	大谷光瑞	台湾島の現在	『大乗』ⅩⅣ-10	1935	大乗社	
73	大谷光瑞	台湾島の現在	『大乗』ⅩⅣ-11	1935	大乗社	
74	大谷光瑞	台湾島の現在	『大乗』ⅩⅣ-12	1935	大乗社	
75	大谷光瑞	熱帯農業	『大乗』ⅩⅨ-08	1940	大乗社	『大乗』ⅩⅨ-8～12,ⅩⅩ-1～4,6～12,ⅩⅪ-4,5,7,9,11,12,ⅩⅫ-1,3に「大谷光瑞関連論集」の一部として連載。
76	大谷光瑞	熱帯農業	『大乗』ⅩⅨ-09	1940	大乗社	
77	大谷光瑞	熱帯農業	『大乗』ⅩⅨ-10	1940	大乗社	
78	大谷光瑞	熱帯農業	『大乗』ⅩⅨ-11	1940	大乗社	
79	大谷光瑞	熱帯農業	『大乗』ⅩⅨ-12	1940	大乗社	
80	大谷光瑞	台湾島の現在	『大乗』ⅩⅤ-01	1936	大乗社	
81	大谷光瑞	台湾島の現在	『大乗』ⅩⅤ-02	1936	大乗社	
82	大谷光瑞	台湾島の現在	『大乗』ⅩⅤ-03	1936	大乗社	
83	大谷光瑞	台湾島の現在	『大乗』ⅩⅤ-04	1936	大乗社	
84	大谷光瑞	台湾島の現在	『大乗』ⅩⅤ-05	1936	大乗社	
85	大谷光瑞	台湾島の現在	『大乗』ⅩⅤ-06	1936	大乗社	
86	大谷光瑞	台湾島の現在	『大乗』ⅩⅤ-07	1936	大乗社	
87	大谷光瑞	台湾島の現在	『大乗』ⅩⅤ-08	1936	大乗社	
88	大谷光瑞	台湾島の現在	『大乗』ⅩⅤ-09	1936	大乗社	
89	大谷光瑞	台湾島の現在	『大乗』ⅩⅤ-10	1936	大乗社	
90	大谷光瑞	台湾島の現在	『大乗』ⅩⅤ-11	1936	大乗社	
91	大谷光瑞	台湾島の現在	『大乗』ⅩⅤ-12	1936	大乗社	

	A	B	C	D	E	F
92	大谷光瑞	台湾島の現在	『大東』XVI-01	1937	大東社	
93	大谷光瑞	台湾島の現在	『大東』XVI-02	1937	大東社	
94	大谷光瑞	熱帯農業	『大東』XX-01	1941	大東社	
95	大谷光瑞	熱帯農業	『大東』XX-02	1941	大東社	
96	大谷光瑞	熱帯農業	『大東』XX-03	1941	大東社	
97	大谷光瑞	熱帯農業	『大東』XX-04	1941	大東社	
98	大谷光瑞	熱帯農業	『大東』XX-06	1941	大東社	
99	大谷光瑞	熱帯農業	『大東』XX-07	1941	大東社	
100	大谷光瑞	熱帯農業	『大東』XX-08	1941	大東社	
101	大谷光瑞	熱帯農業	『大東』XX-09	1941	大東社	
102	大谷光瑞	熱帯農業	『大東』XX-10	1941	大東社	
103	大谷光瑞	熱帯農業	『大東』XX-11	1941	大東社	
104	大谷光瑞	熱帯農業	『大東』XX-12	1941	大東社	
105	大谷光瑞	熱帯農業	『大東』XXII-04	1942	大東社	
106	大谷光瑞	熱帯農業	『大東』XXII-05	1942	大東社	
107	大谷光瑞	熱帯農業	『大東』XXII-07	1942	大東社	
108	大谷光瑞	熱帯農業	『大東』XXII-09	1942	大東社	
109	大谷光瑞	熱帯農業	『大東』XXII-11	1942	大東社	
110	大谷光瑞	熱帯農業	『大東』XXII-12	1942	大東社	
111	大谷光瑞	熱帯農業	『大東』XXIII-01	1943	大東社	
112	大谷光瑞	熱帯農業	『大東』XXIII-03	1943	大東社	
113	単行本					
114	大谷光瑞	『食』	単行本	1931	大東社	「本篇は光瑞殿下の著作にして昭和六年二月十五日本社より単行本として発行せしものである。」
115	大谷光瑞	『花』	単行本	1931	大東社	「本篇は光瑞殿下の著作にして昭和六年九月十五日本社より単行本として発行したものである。」
116	大谷光瑞	『大谷光瑞全集』第六巻　衣義編	単行本	1935	大東社	「香料製造は私の職業で御座いますので……」(p.524 (6-))
117	大谷光瑞	『大谷光瑞全集』第七巻　食世編	単行本	1935	大東社	「所感の自覚」(p.514-)
118	大谷光瑞	『大谷光瑞全集』第八巻　衣味編	単行本	1935	大東社	「食」(pp.3-189)「花」(pp.191-322)
119	大谷光瑞	『大谷光瑞全集』第十巻　論策編	単行本	1935	大東社	「米價平準論」(p.406-)
120	大谷光瑞	『台湾島の現在』	単行本	1939～1940	大東社	第3章「産業」
121	大谷光瑞	『大谷光瑞興亜計画』	単行本	1939～1940	大東社	第15篇「熱帯農業」
122	大谷光瑞	『蘭領印度放送』	単行本	1940	有光社	
123	大谷光瑞	『熱帯農業』	単行本	1940	大東社	『大谷光瑞興亜計画』6-9巻を合冊本
124						
125	その他					
126	大谷光瑞	香草の栽培　経営の基礎漸く確実　ジャバ通信（その三）	『国民新聞』	1922	国民新聞	徳富蘇峰
127	香木文敏	蘭領印度の農園経営に就て	『大東』1-2	1922	大東社	
128	片山章雄	コーヒー園，精料植物の栽培，ゾバの移植・・・南方で手がけた事業の数々	『太陽』29-6(360)	1991	平凡社	